

豆句集



その五粒目
2014 年立冬号

目次

*俳句

Dark Fantasy 井上雪子 …2

手紙 梅津志保 …5

大きな時間／小さな椅子 吉野裕之 …8

*エッセイ

季語の深み 井上雪子 …10

一直線につながる 梅津志保 …11

*メッセージ

ここからどこかへ …12

豆句集

豆句集 みつまめ
2014 年立冬号 (通巻第 5 号)



みつまめ

Dark Fantasy

井上雪子

かなかなや背中で夕風待ちにけり
やはらかに石を描くや夏の水
キンモクセイ語らぬ痛み of 降伏点
問題は僕そのものか葛をひく

マ
McDonald's から月まで帰るねがひごと

Dark Fantasy インドの菓子 of 紅き箱

眼の奥の新月が問ふ neglect

十月のENEOS夜は旅めきぬ

無職かなトランクふたつ初時雨

晩秋や齒磨きゆつくりゆつくりと

銀杏降る日やふたり乗りして海へ
雨三日もう起こせない秋の草
豚汁やシングル・ファザーが分ける夢
マフラーとボカロや君の夜を跳べ
僕たちに夜を返しにオリオン来

手紙
梅津志保

先生が開ける蛇口や七月来
自転車は横倒しのまま夏岬
工場の時計を止めし黒揚羽
稜線は鉛筆の濃さ夏きざす

neglect：育児放棄など他者を省みない行為

ENEOS：ガソリンスタンド名

ボカロ：ボーカロイド／合成音声、合成音声で作られた楽曲

牛放ち夜は明けにけり秋ざくら
君が顔上げて見るたび今日の月
秋涼し白き馬立ち浜辺かな
釣り人は腰を定めるそぞろ寒
レース鳩帰る羽音よ秋の空
あたらしき靴やわらかに秋の草

山下る犬の耳立つ秋の風
大小の手は重なって火の恋し
山荘のポストに手紙秋澄めり
コンテナの積まれる埠頭冬ざる
中華街手相見に問う息白し

大きな時間／小さな椅子

吉野裕之

谷中から手紙来てゐる冷奴

降り出して走るふたりや蛞蝓

たとへばが約束となる九月かな

午過ぎは大きな時間秋の貨車

秋の日のために小さな椅子がある

葡萄来る正しく箱に収められ

一冊にあまたのことば鱗雲

冷やかに空気ありけり石の上

ラフレッシュアみたいな声が冬の人

白線の後ろに立つて冬日和

●季語の深み◎井上雪子

旅に病で夢は枯野をかけ廻る

三百年以上前の芭蕉の俳句だが、私にはストリートで新鮮な、その力の不思議さのシンボルのような一句だ。

旅に病むとは現代なら渡航先の風土病くらい、しかし芭蕉には「旅への切望＝病んでいる」という自覚があったのだらうか、単なる旅先の不安ではなく、夢を追う一途さ、甘美な孤独さが失速することなく力強く届いてくる。

復本一郎氏は「芭蕉は、この句におい

●一直線につながる◎梅津志保

雑誌の頁をめくる。ふと、道に戻り、ある風景を探すように、前の頁に戻って、一句を探す。俳句がくつきりと立ち上がっているのだ。

軒の氷柱に息吹つけて黒馬よ黒馬よ

白田亞浪

が、その俳句だった（小島健抄出「格調高き大正俳句30」「俳句界」二〇一四年九月号）。この俳句に呼ばれたのはなぜか。

作者は、凍り付いた冬の世界に、ひとつのいのちを見つける。それは、黒馬の息吹。きっと白く太い氷が溶けるほどの勢いのある息を吹きかけているのだろ

うて、その『冬がれてさびしき景気』の中に、彼が生涯求めつづけた『さび』の美を凝視しようとしているのである。芭蕉は『さび』の詩人として一期を閉じたのであった」と書く（『芭蕉歳時記』講談社選書メチエ、一九九七年）。「枯野」の本意から一句を読み解き、芭蕉が求めた表現の斬新さ、世界観の深さが提示される。

私はどうにも季語への関心が薄かったのだが、『芭蕉歳時記』は季語の本意の理解を促す。芭蕉と季語の深みをシェアするような距離感を味わい直し、そこから俳諧への敬意と言葉の世界の深さ美しさを未来に放つ芭蕉の、その季語が繋ぐリアルルの永遠にゆっくりとたどり着く。

う。

この力強さ、そして、対比する白と黒の美しい世界に、私は一瞬で引きこまれてしまったのだ。

そして、小島氏はこう書いている。「亞浪句は、北海道の厳冬の雄大苛酷な景情を、畳みかけた韻律で詠う」。ああ、そうなのか！ 声に出して読んでみる。私心が動かされたのは、韻律にもあったのだ。自分の読みだけでは足りない「知識」を教えてもらって、この句の持つ本質に更に近づく。

作者、優れた鑑賞、そして読み手が一直線に、つながる瞬間。私は、豊かな世界を確かに受け取ることができた。

ここからどこかへ



句集は読まれないものなのだろうか。本屋さんでも図書館でも、俳句コーナーの大半を占めるのは、入門書・上達法・季語論…。

句集／俳句は誰に向かって読まれたがっているのだろうか。

今号は優れた鑑賞というフィルタを通して、再び誰かの心の本当に深いところを打つ、そんな言葉／作品の放ち方の意味を考えてみました。

「豆句集 みつまめ」は、第5号からは梅津志保、井上雪子のふたりでお届けします。

異なるということこそ、そもそもの「みつまめ」の前提にあったこと、けれど、なにかが足りない、そんなことから再びどこかへ…。

心の深くへ届けられる俳句の力・言葉の力を研いでいきたいと思います。

豆句集



豆句集 みつまめ

井上雪子

梅津志保

Producer * 吉野裕之

このファイルはホームページ配布版のため、
奥付の内容が印刷版のものとは異なります。



豆句集 みつまめ

2014 年立冬号（通巻第 5 号）

2014 年 11 月 7 日発行

発行所

みつまめ工房

website >> <http://homepage3.nifty.com/a-un/mitsumame/>

blog >> <http://819mitsumame.blogspot.jp/>

制作：アトリエ云 印刷：啓文社

定価：300 円（税別）